

ZOCALO 2023 6 ▶ 7

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

無意識の世界を描く—横尾龍彦の絵画制作

企画展「横尾龍彦 瞑想の彼方」

2023年7月15日(土)～9月24日(日)

横尾龍彦(1928-2015)は、日本とドイツを往来しながら活動し、晩年を埼玉県秩父市で過ごした作家です。日本の美術館で初の回顧展となる本展は、北九州市立美術館、神奈川県立近代美術館と共同で開催するもので、当館は最後の会場となります。

横尾は生涯、幾度も画風を変化させながら自己を超えた無意識の世界の表現を追求しました。ここでは、横尾の画風の変遷についてご紹介します。

1928年、福岡市に生まれた横尾は、日本画家の父の影響、そして芸術を重視した母の後押しを受け、1945年、東京美術学校日本画科に入学します。奥村土牛らに指導を受けますが、次第に西洋絵画に関心を寄せていくようになります。また、戦争経験によって神道に懐疑的であったことからキリスト教を信仰するようになり、卒業後は北九州市のカトリック学校で美術教師を務めながら、公募展に出品を重ねました。

1965年、パリやジュネーブを訪れて西洋美術の見聞を深めた横尾は、シュルレアリスムを通じて無意識世界を表現することを試み始めます。無作為に絵具を塗って出来上がった画面からイメージを想起し、具象的なモチーフを描きこんでいく手法で、油彩画やガッシュによる作品を制作しました。帰国後の1966年、大学で交友のあった加山又造に紹介され、青木画廊で個展を開催。有機的な物体、人間や動物の頭部などが混然となった作品を発表します^①。澁澤龍彦は、自身の内面に深淵を見出し表現する作家として横尾を評価し、個展に序文を寄せます。同様に横尾を高く評価した種村季弘は、横尾にドイツ滞在を勧めると、その後も深い交流が続きました。



①



②



③

1971年、美術教師を辞すと、翌年イタリアに滞在します。この頃、絵具のにじみやデカルコマニーによって偶発的に形作られた色面に、異国風の面貌の人物や神話的な動物を細緻に描きこんだ作品を制作し^②、1973年に初の画集『幻の宮』を刊行します。全国で刊行記念展が開催され、各地でファンを獲得しました。

暗く妖しい雰囲気のある作品を制作する一方、1970年代後半から明るい色調と広がりのある空間構成の画風も展開します。地塗りの絵具を手で直接かき回して画面を抽象化し、『黙示録』や幻想的な風景などをテーマにした絵画を制作しました^③。新たな作風を生み出したこの時期、横尾は西洋絵画に強く影響を受けた自身の作風に行き詰まりを感じ、転機を求めていました。1978年、鎌倉市の禅堂で接心(瞑想し修行すること)に参加します。同年、美学者の高橋巖が主宰するルドルフ・シュタイナー研究会に加わり、西洋の神秘主義思想も学び始め、東西の思想、宗教を貪欲に吸収しました。

1980年、ドイツ人のコレクターに誘われ、ドイツに移住します。そして制作と禅の修行で日々を過ごすなかで、西洋の人々とは全く異なる日本人としての精神を自覚し、徐々に日本回帰の志向を強めていきます。1980年代後半には、黄土と墨を多用し、書を思わせる描線や絵具の飛沫を残した抽象画、禅画に由来する主題の作品を制作します^④。



④

横尾は東洋の精神性に立ち返りつつも、東西どちらにも拠らない普遍的な表現を得ようと模索し、やがて禅のイメージからも離れていきます。

1990年代末、特定の文化や宗教、思想に偏らない独自の画風を確立します。まずカンヴァスを前に瞑想し、自意識の滅却に努めます。そして、カンヴァスに水を打ち、砂を混ぜた顔料を振りまきます。先端にパステルを括り付けた長い棒や絵筆を動かし、さらにはカンヴァス自体を持ち上げて大きく揺らし、作品を仕上げしていきます。制作にあたり、特定の画法や知識は必要とされません。ただ瞑想によって、「自分が描くのではない、水が描く、風が描く、土が描く」という意識で集中し、カンヴァスに向かいます。こうして出来上がった作品には、絵具の流れや飛沫痕といった素材の特性が際立っています^⑤。



⑤

横尾はこれまでの作風に共通して^⑤、てみられる偶発性、無作為性を徹底させて、このスタイルを完成させました。そして晩年まで、「自己無化」を極めることで無意識世界の表出を目指したのです。

本展では、『幻の宮』掲載作品や2014年の絶筆など、初期から晩年までの作品を時系列にご紹介します。横尾が追い求めた芸術表現について、変遷する画風を追いながら思いをめぐらせていただければ幸いです。(K.M.)

① 《エゼキエルの幻視》1966年
② 《秘儀》1970年
③ 《朝焼け》1983年

④ 《円相》1989年
⑤ 《不可知の雲》2004年
(すべて個人蔵)

MOMASノ海 Homme libre, toujours tu chériras la mer!

MOMASコレクション
2023年5月13日(土)～8月27日(日)

こゝろ自由なる人間は、とはに賞づらむ大海を。
—シャルル・ボードレール「人と海」(上田敏訳)より

地球の表面の約7割をおおう海が誕生したのは、今から41億年ほど前といわれています。気の遠くなるような太古の時代から存在している青い海は、長い長い時間をかけてあらゆる生命を育んできました。現在わかっているだけでも、海には実に25万種類の生き物が棲んでいるといわれています。命の源である広大な海は、フランスの詩人ボードレールが謳い上げたように、人々の自由な心を受け入れる存在です。ボードレールの詩にはさらに続きがあり、私たちが苦しみから解き放ち、人の心と同じようにはかり知れない豊かさと秘密を持つ海を讃えます。そして、人間と海は永遠の闘いを分かち合う同志であると締めくくられます。はてしなく自由で、生も死も宿す神秘に満ちた海。そのような海を題材に、どういった美術作品が生まれてきたのでしょうか。

たとえば日本では、古くは社寺・名所や宿場の景色、漁や行楽など生活のひとこま、近世の南蛮貿易や明治期の開国でにぎわう港などの場面で海が描かれてきました。また波や魚貝、船といったモチーフを巧みに使った工芸品も数多く生まれています。近代になると西洋美術からの影響を受けて、海に向けられるまなざしにも変化が生じます。神話・伝説上あるいは戦乱などの現実の舞台としての海景に加えて、作家が目あたりにした純粋な風景である海、ひいては心象風景や幻想の中の海など、近世までとは異なる海への視点が登場します。立体作品の中には、波のイメージを抽象化した造形なども見ることができます。夏の日差しがまぶしい5月～8月のMOMASコレクションでは、収蔵品の中から海をテーマにした作品を展示します。



スクリプカリウ落合安奈《Blessing Beyond the Borders》
2019年(プリント2022年) ゼラチン・シルバー・プリント、紙

ここで出品作品の中から、今回のテーマを象徴する1点として現代の作家スクリプカリウ落合安奈の《Blessing Beyond the Borders》(2019年)をご紹介します。波しずかな海上に、ひとりの人物が漂っています。はるか沖合に横たわるのは、島のような陸地。果たしてこの人は、島に向かっていのでしょうか、それともこちらに向かって泳いだのでしょうか？ 泳ぐ人はどんな人でしょうか？ 年齢・性別・出身地などは分かりません。舞台となっているのはいつの時代なのでしょう？ 現代、それとも過去のワンシーン？ ここはどこなのでしょう？ 岸から近いのでしょうか、それとも陸から遠く離れた海原のただ中なのでしょう？ 場所は日本でしょうか、それとも外国の海でしょうか？ 周りには、船や人の影は見当たりません。曇り空の下、楽しく海水浴に来たのでしょうか？ もしくは、船が転覆してひとり海中に放り出されてしまった現代の難

民なののでしょうか？あるいは、はるか昔に島から島へ移動した渡来の民なののでしょうか？ それともまさか、自ら命を絶とうと身を投げてしまった人なののでしょうか？

一見ありふれた身近な光景のようですが、よく考えると謎の多い図像です。この作品について、向き合う人それぞれが自由に解釈できるようにと、作者は意図的に説明的な要素を省いています。実のところ背景となっている島は、作者の手で生み出された実在しない架空の島なのです。“どこの誰かわからない”、だからこそ“どこの誰にでもなり得る”。作中の人物はあなたに身近な人かもしれないし、もしかするとあなた自身かもしれない。そんなふうに、見る人に訴えかける普遍的な力を持った作品です。

作者のスクリプカリウ落合は、この作品に《越境する祝福》というタイトルをつけました。海は「人々の移動を『阻む』側面と、潮流や浜への打ち上げによって出会うはずのなかったものを『つなぐ』という両面性」を持つと作者は語ります。人やものを隔てながらもつなぐ海。それでは海中の人物が越えようとしている境界とは？—国境、過去と現在、生と死など、さまざまな境界を越え、その結果もたらされるであろう《祝福》へ想像をめぐらせるのも、この作品の楽しみ方のひとつでしょう。(G.R.)



インドネシア、バリ島の海(筆者撮影)